

化学小説

人生は化学式。

〜黒鉛電極と娘の決意〜

「お父さん…あのね」

「おお、そうだそうだ、本番前にお手洗いに行っておくかな」
父は、私から最後のあいさつをされるのをずっと避けている。
結婚が決まっただけというものの、家でも外でも私と二人きりになるのを不自然に拒み続けていた。そして昨日、結婚式前夜に意を決し、あえて実家に泊まり、想いを伝えようと試みたが、「明日が早いから」といい、父はそそくさと寝てしまった。
母はあきれていた。そしてついに結婚式当日。

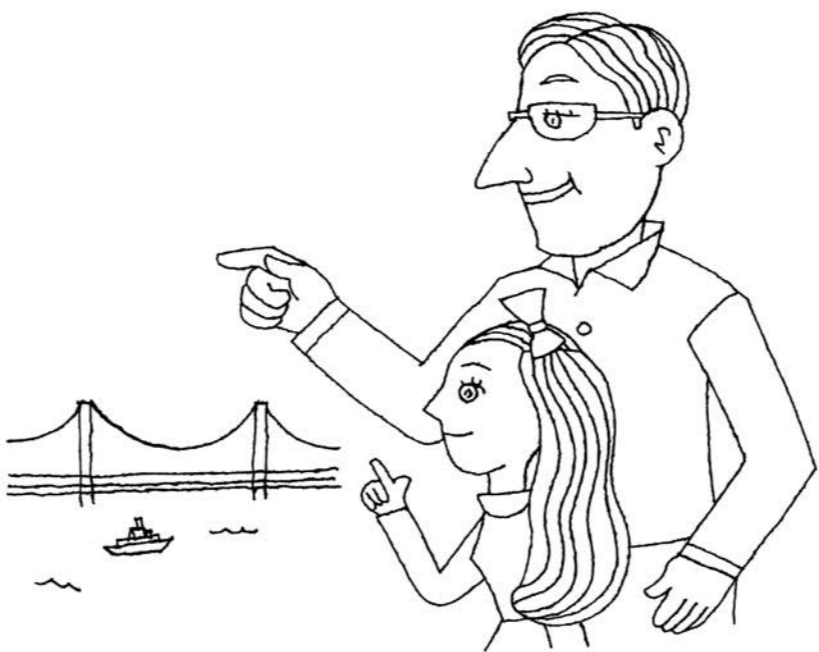
パーシブロードを歩く直前こそが二人つきりになれる最後のチャンスだと思い、私は再び父に想いを伝えることにした。

「ねえ、お父さん！聞いてほしいことがあるんだけど」

「…お前は、黒鉛電極って知ってるよな？」

「えっ？ああ、うん。いつもお父さんが話してたからね。」

鉄を熱で溶かして、橋とかにリサイクルできるあれでしょ？」
化学会社に勤めている父は、普段は頑固で無口な人だったが、仕事の話だけは楽しそうに話してくれた。もちろん子どもは私には良く分からなかったが、何度も同じ話をするので、気づくと覚えていた。ただ、今、その話をしている暇はない。



「突然、何言っているのお父さん、時間がないから聞いて！」

「お前のな…夫になる彼に言ったんだ。結婚の申し込みに来た時に、娘は私に似て頑固な所があるから、ケンカをしたら君が黒鉛電極のようになって気持ち溶かしてくれてな」
全然、知らなかった。彼が挨拶に来てくれた時、母と一緒に席を立て戻ったら、緊張していた彼が何だか少し父と打ち解けた感じになっていたのは、そういう理由だったとは。「それとな、お前も黒鉛電極のようになってほしいんだ」
「どういうこと？彼は私と違って頑固じゃないけど？」

「ああ、そうじゃない。もしアイツが仕事とかで失敗して落ち込んだ時は、固くなった心を暖かく溶かし、もう一度頑張れるようにしてやってほしいってことだ…母さんのようになまさか父が母のことを、そんな風に頼っていたことに驚いた。」
「そうすれば、ほら、地球環境と同じように家庭環境にも負荷がかからないからきつと、永いことうまくやっていけるはずだ」

「お、お父さん、あのね…」

「おお、それとな…ウチの黒鉛電極の事業がな、別の会社と一緒にすることで、世界で一番になったんだ」

「は？いや、急に何言ってるの？どういう意味？」

「まあ…あれだよ。お前もこれからアイツと一緒に…」

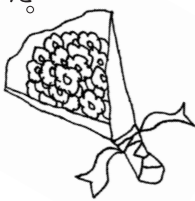
「世界一しあわせになるんだぞ」

「お…父さん…長い間本当にお世話になりましたその瞬間、扉が開いた。明るい光と共に現れた

パーシブロードを、

しっかりと父の腕に導かれ

私は新しい一步を踏み出した。



化学の子カラで夢を具体化。

SHOWA DENKO

www.sdk.co.jp

